別紙資料

**グループワーク①記録より**

グループ構成委員　　Ｎ委員・Ｉ委員・Ｃ委員・Ａ委員・Ｏ委員（記録－事務局）

≪コロナ禍の高齢者の生活状況について≫

Ｉ委員：

コロナ禍で、認知症状のある高齢者が増えたかもしれない。社会福祉協議会、地域

包括支援センターに相談しながらその都度、対応しています。

Ｃ委員：

コロナ禍で、目の輝きを失った方や、買い物にも行かない、出掛ける機会や人と

触れ合うこともないという方がいます。身だしなみ、メリハリが少なくなっており、ボランティアグループでも「今日は行けない」と活動を突然キャンセルする方もいます。地域で認知症状がありそうな方がいますが、自分から家族へ声の掛けづらさを感じています。

Ａ委員：

シルバー人材センターでは、さまざまなイベントが中止になっており楽しみにされ

ていた方は寂しさを感じています。気力が衰えて心配な高齢者がいます。

≪生活課題について≫

Ｏ委員：

なかなか外出できない方が多く、高齢者の孤立が問題となっています。

Ｎ委員：

体力、気力が低下している高齢者が多く、色々な地域包括支援センターから、介護保険サービスに関する相談が増加していると聞きます。オンライン講座で、高齢者も福祉委員の方々も身近な場所でつながる喜びをかみしめていました。オンラインが進む中で、SNSは詐欺的なこともありえるため注意喚起していく必要があります。

≪団体の活動について≫

Ｉ委員：

ふれあい外出配食サービスを５か所で20回ほど実施。80代から90代の方の参加が増えています。

Ａ委員：

サービスの相談、依頼件数は制限なく対応しています。一時は、サービスの相談、依頼件数は減少しましたが徐々に増加傾向にあります。基本的には、対応できています。男性７割、女性３割の割合で対応中です。

Ｏ委員：

約９割の高齢者がコロナワクチン接種済みです。ウイズコロナで活動できるよう、

感染対策しながら市の事業も再開していきます。

先日、各地区民生・児童委員の皆様の協力を得て敬老行事を実施していただきました。今までは、命を守るために外出を控えるようお願いしていましたが、これからはフレイル予防も大切です。見守りにもつながるため、外出する機会を作っていくような事業、手法を考えていかなければならないと思っています。

また、ＩＣＴが進んでいるため、オンライン講座や、市の生きがい教室等でのスマホ講座等にも取り組んでいきたいです。

≪その他について≫

Ｃ委員：

地域での開催されているスマホ講座はすごいと思いました。80代と20代をつなげる発想です。

Ｎ委員：

吹田市は大学が多い町で、地域の強みとして、いろいろなことに繋げていきたいです。

**グループワーク②記録より**

グループ構成委員　　委員長職務代理者・Ｇ委員・Ｈ委員・Ｍ委員

（記録－事務局）

≪コロナ禍の高齢者の生活状況について≫

Ｇ委員、Ｈ委員：

コロナ禍で長い自粛生活が続き、体力がめっきり落ちています。

Ｈ委員：

外へ出ることが少なくなり、髭剃りしないなど身だしなみに、気を遣わなくなりました。自分も含めてそう思います。

Ｇ委員：

施設を使いたくても使わしてもらえない状況が続き、元気だった方でもこの２年間の自粛で予想外なほどに弱っていて、相当なダメージを受けていると思います。吹高連の活動も自粛を要請され、屋内では声を出すカラオケは駄目と言われ、声を出していけないなら将棋や囲碁くらいしかできないなどの活動に制限がありました。

Ｈ委員：

人と会わない、話さないことが増えてどんどん気持ちの面や認知機能の低下がみられています。精神的な辛さもあるみたいで、現実に変わってしまった人も地域の中にいます。

Ｍ委員：

私はコロナ禍であっても弱りたくはないと、今迄通り歩くようにしていました。マスク未着用で怖がる人もいるので人が通ったら避けて歩くようにしてきましたが、先日小さな段差で躓き転倒してしまい、自分は大丈夫と思っていたのに日ごとに弱っていたと実感することがありました。

Ｇ委員：

選挙で一日会場に座って見ていましたが、歩き方などから驚くほど弱ってしまった人達をたくさん見かけました。この２年は自粛、自粛で、今まで元気だった高齢者にもかなり大きなダメージを与えました。

≪生活課題について≫

Ｈ委員：

自分の地区でライン講座の声掛けをしてもらいましたけど「無理、無理」「そんなのできません」と頭ごなしに拒否的でした。先程のＮさんからの報告を聞くと、学生さんと一緒でとても楽しそうだったのでもう一度提案してみようかなあと思いました。

Ｇ委員：

スマホやオンラインの講座とか、高齢者生きがい活動センターや他の場所でしていてもなか

なか参加してみようとはならないです。地元でやってくれるのであれば、参加はしやすいと思います。

委員長職務代理者：

　　民生委員さんが教えるとなると同世代的なところもあるし、苦手な人もいると思いますので、例えば包括センターやケアマネジャー、地域の事業所の人などに声をかけて協力してもらったりも考えられます。

Ｈ委員、Ｍ委員：

１対１とかでスマホの使い方やラインを教えてもらえるなら、やってみようと思うかもしれません。

委員長職務代理者：

ラインが使えるようになって友達とラインしようとしたら、QRコードを読み取る。

　それができるようになれば、市のホームページのQRコードなども使えるようになり

便利になります。

Ｇ委員：

多くのイベントが中止になってしまい、高齢者が参加する機会が減少しました。

Ｍ委員：

同じ担当の役員とはみんなラインで繋がっています。使えたら便利なので、講座とかの情報があったら個々に教えて受けてもらったりもしています。どんどん広めていければいいと思います。自分の地区にもライン講座お願いしたい。

≪団体の活動について≫

Ｇ委員：

緊急事態宣言が明けて吹田市高齢クラブ連合会でカラオケ大会をしたら、200名を超える参加がありました。時期的に世間体はどうやろう…と主催する側は思ったりもしていましたが、みんな出たくて仕方なかったのだと思います。

Ｍ委員：

施設ボランティアの活動も長いこと行っていません。11月に入って今週の金曜か

ら麻雀が再開し、今日から百歳体操が再開しています。徐々に青信号になってきているので、短時間でも前のような活動になってくればいいと思います。

いきいきサロンは案内状がなく、緊急事態宣言で長らく途切れた後の再開になるので、１件１件訪問してまわりました。食事会といかないまでも、お茶を飲んで15人くらい集まってくれたらいいと思っています。

**グループワーク③（オンライン参加）記録より**

グループ構成委員　Ｅ委員・Ｄ委員・Ｋ委員・Ｆ委員

事務局　　（記録-事務局）

≪コロナ禍の高齢者の生活状況について≫

Ⅾ委員：

　　　法人として高齢者の施設に援助には行ったものの、本人は外に出られず気晴らしができない状況でした。

Ｅ委員：

夫婦仲が悪くなったという相談があり、傍にいることが多くなったため、以前より見える部分が変わり、手が出るという話でした。隠して辛抱してはいけないこと、誰かに話をするなどが大切で、息抜きが大切だと思います。

Ｋ委員：

訪問介護として主宅を訪問した際でも、高齢者は外に出られず、デイも行けず外との交流がないため、元気・意欲がなくなり寂しそうでした。

Ｆ委員：

　　　コロナウイルス感染症により、高齢者は閉じこもりが顕著になったと感じます。人と話をしていないため、急に話をすると声が出ないなどがあり、電話でもいいから声を出すように声掛けしてきました。社会との繋がりのない高齢者が多くなっていることに焦点を当てていかないといけないと思います。

Ｅ委員：

　　　高齢者の中にはラインを使用できるようになり、以前はあきらめていたが使えるようになったという方が増えた。

　Ｌ委員：

　　　実家にはなかなか帰省もできず、孫とも会えず寂しい思いをしたのではないかと思いますが、御近所との繋がりがより強くなっているようです。

≪生活課題について≫

Ｋ委員：

　　　介護保険のサービス事業所なので止まることはなかったですが、高齢者の中でデイサービスへ行くと感染するのではないかと家族が怖がり、デイサービスに行くのを止めるなどがありました。

≪団体の活動について≫

　Ｄ委員：

　　　活動としては施設から高齢者を連れ出すことはできませんでしたが、病院への付き添いだけはできました。またボランティア活動としては外でできるハイキングなどの活動ができたり、草抜きの援助などはできました。

Ｅ委員：

　　　高齢者の活動支援している団体数が少なくなりました。コロナ禍により長期間休止しているため、活動を躊躇している感じで、コロナをきっかけに活動を見直している様です。高齢者の活動は足元を見直すよいきっかけになったのではないかとも思います。ＰＲ方法や活動方法など、色々考え直すこととなりました。

Ｌ委員：

　　　自分で何ができるかを考えて、傾聴ボランティアの養成講座に参加しました。近所のつながりを考えるきっかけになりました。

Ｋ委員：

　　　コロナのことを変に隠していることもありました。高齢者の家族の方には伝えてもらうことで早めに対処できることもあるため、早く情報を伝えてもらうように声掛けしています。

≪その他について≫

Ｋ委員：

　　　高齢者は外に出れるようになって、いきいきされている姿を感じました。

　Ｅ委員：

　　　高齢者の方々がコロナをきっかけにオンライン講座などに出向いて行っています。今までオンラインはもういいとあきらめていた方も、コロナ禍の寂しさを何とかしたいという思いが強くなり、オンラインで人と繋がろうと思ったのだと思います。